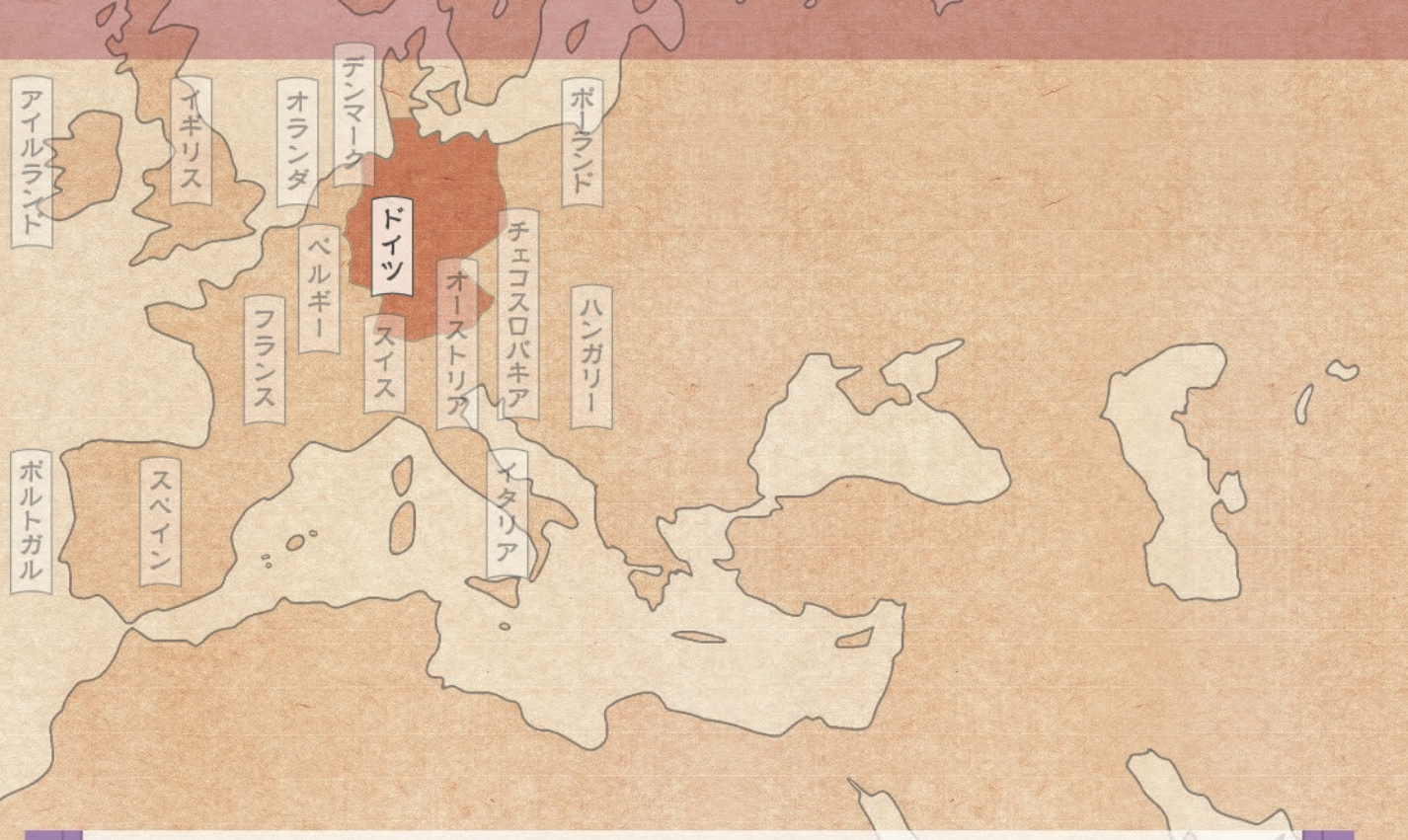




特別講演会

「ヨーロッパに渡った琉球王国の文化遺産」

2025年 9月27日[土] 14:00～17:15 13:30開場

【会場】沖縄県立博物館・美術館
○ 講演 演：3階 講堂
○ パネル展示：1階 エントランス

プログラム

14:00～14:05	開会挨拶	沖縄美ら島財団
14:05～14:20	プロローグ	「在外琉球関係資料の収集経緯とその歴史的背景」 登壇者：高良 倉吉 氏
14:25～15:05	講演①	「琉球王国の工芸美術とヨーロッパの琉球のイメージ形成」 登壇者：クライナー ヨーゼフ 氏
15:05～15:20		休 憩（15分間）
15:20～16:00	講演②	「東京国立博物館とベルリン国立民族学博物館の琉球資料」 登壇者：佐々木 利和 氏
16:05～16:45	講演③	「琉球王朝文化との再会ー先人たちの手わざに触れてー」 登壇者：祝嶺 恭子 氏
16:45～16:50	閉会挨拶	沖縄美ら島財団
16:50～17:15		祝嶺恭子氏の染織作品鑑賞・アンケート記入

後援

沖縄県教育委員会
沖縄県立博物館・美術館
沖縄県博物館協会
那覇市教育委員会

NHK 沖縄放送局
沖縄テレビ放送株式会社
株式会社エフエム沖縄
株式会社沖縄タイムス社

株式会社ラジオ沖縄
株式会社琉球新報社
琉球放送株式会社
琉球朝日放送株式会社

講演会当日の
オンライン視聴は⇒
こちらから



ヨーロッパに 渡った琉球王国の 文化遺産

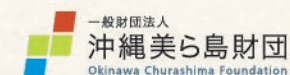
2025年 9月27日[土]
14:00～17:15 13:30開場

【会場】沖縄県立博物館・美術館

○ 講演 演：3階 講堂
○ パネル展示：1階 エントランス

【主催】一般財団法人 沖縄美ら島財団

TEL. 098-943-3820



※ 地図の国名称は、琉球・沖縄関係資料を所蔵する、現在まで世界で確認されているヨーロッパ諸国および中国と台湾、そして沖縄のみ記載。

特別講演会 「ヨーロッパに渡った琉球王国の文化遺産」

一般財団法人沖縄美ら島財団では、首里城に関する調査研究および普及啓発を柱とするさまざまな事業を継続的に実施しております。その一環として、2008年および2009年には、「在外首里城関連文化財調査修復等事業」において専門委員会を設置し、海外に所蔵されている琉球関係資料の情報収集を行いました。

当財団による初の在外調査は、2012年に祝嶺恭子氏とともに実施した、ドイツ・ベルリン国立民族学博物館所蔵の琉球・沖縄関係染織資料に関する補足調査です。この調査は、1992年から1993年にかけて同氏が単独で行った悉皆調査を基礎とし、資料全体の撮影や繊維の観察（マイクロスコープによる撮影）などを通じて、資料の再確認および記録の体系化を目的に実施されました。その成果は、2013年に当財団より刊行された『ベルリン国立民族学博物館所蔵 琉球・沖縄染織資料調査報告書〈資料編・図版編〉』にまとめられ、染織資料に関する基礎的かつ貴重な学術資料として、今日に至るまで広く活用されています。

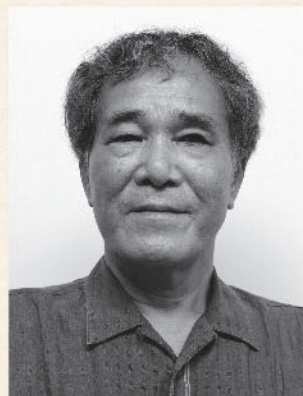
ヨーロッパにおける琉球関係資料の本格的な悉皆調査は、1983年から1986年にかけて、ドイツ政府の研究助成を受けて、ボン大学日本文化研究所により初めて実施されました。続く1992年には、ドイツ日本研究所の初代所長（～1997年）クライナーヨーゼフ氏を中心に、外間守善氏（調査団長）、宮城篤正氏、前田孝允氏、祝嶺恭子氏らによる再調査が行われました。その成果は、同年に浦添市美術館で開催された展覧会「世界に誇る琉球王朝文化遺宝展—ヨーロッパ・アメリカ秘蔵」（主催：琉球放送、沖縄タイムス社、ドイツ—日本研究所）において公開され、国外に所在する琉球王国関連資料の存在とその文化的価値を、広く社会に示す契機となりました。この特別展をきっかけに、在外琉球・沖縄関係資料への関心が高まり、沖縄県内の文化財関連機関や研究者による調査が活発に行われるようになり、現在に至っています。

本講演会では、これらの調査に携わってこられた研究者の方々を講師にお迎えし、琉球・沖縄関係資料の収集経緯やその文化的意義、さらに復元製作や基礎研究への活用の可能性について、多角的な視点からご報告いただきます。あわせて、今後の在外琉球・沖縄関係資料の調査・研究・保存・活用に資する基礎的な情報共有を目的として、これまで沖縄県内の関係機関や研究者により実施されてきた調査の経緯を整理・一覧化した資料を配付いたします。また、講演会場では祝嶺恭子氏による復元製作の織作品を展示するとともに、併設の1階エントランスでは、世界各地に所在する琉球・沖縄関係資料を示すマップ、調査時の写真、および一部の調査資料を紹介いたします。

最後に、本特別講演会の開催にあたり、多大なるご支援とご協力を賜りました関係者の皆様、ご後援いただきました諸機関に、心より御礼申し上げます。

令和7年 9月

一般財団法人沖縄美ら島財団
総合研究所 琉球文化財研究室



高良 倉吉 氏

たから くらよし

琉球大学名誉教授
（文学博士・琉球史）

略歴 1947年 沖縄県伊是名島生まれ、南大東島育ち
1971年 愛知教育大学卒業
1993年 九州大学博士（文学）

職歴 1973年 沖縄県沖縄史料編集所 専門員
1987年 沖縄県立博物館 主査
1988年 浦添市立図書館 館長
1994年 琉球大学法文学部教授（～2013年3月）
2005年 九州国立博物館評議員（～現在）
2013年 沖縄県副知事（～2014年12月）
2019年 首里城復元に向けた技術検討委員会委員長（～現在）

業績 1993年 NHK大河ドラマ「琉球の風」監修
2011年 NHK時代劇「テンバスト」時代考証

受賞歴 1982年 沖縄タイムス出版文化賞『琉球の時代』
1988年 沖縄文化協会賞「琉球王国の構造」
TOYP大賞「地域活性化貢献」（日本青年会議所）
1990年 伊波普猷賞『琉球王国史の課題』（沖縄タイムス社）
1997年 沖縄研究奨励賞「琉球王国史研究」（沖縄協会）
2004年 国際交流奨励賞・日本研究賞（国際交流基金）
2025年 第35回福岡アジア文化賞 大賞（福岡市）

著書 ○『琉球の時代』（筑摩書房、1980年／台湾語版、2018年）
○『琉球王国の構造』（吉川弘文館、1987年）
○『琉球王国史の課題』（ひるぎ社、1989年）
○『琉球王国』（岩波書店、1993年／韓国語版、2008年／英語版、2025年）
○『「沖縄」批判序説』（ひるぎ社、1997年）
○『アジアのなかの琉球王国』（吉川弘文館、1998年）
○『沖縄イニシアティブ』（共著、ひるぎ社、2000年）
○『「沖縄問題」とは何か』（共著、弦書房、2007年）
○『琉球王国史の探求』（格樹書林、2011年）
○『沖縄問題—リアリズムの視点から』（編著、中央公論新社、2017年）

「講演要旨」

「在外琉球関係資料の収集経緯とその歴史的背景」

周知のように、東京国立博物館を始めとする国内の博物館等には琉球関係資料が数多く収蔵されている。国外については、ボン大学のヨーゼフ・クライナー氏らの精力的な調査によって、その実態が明らかとなった。

沖縄戦とその直後に、米軍関係者によって不法に持ち出されたケースを除けば、在外琉球関係資料は、購入や寄贈等を通じて独自に収集されたものである。ドイツの国立民族学博物館やアメリカのボストン美術館、ピーボディ・エセックス博物館がその好例であり、琉球・沖縄に対する関心に基づいていた。そして、その資料を大切に保存してきた。

沖縄側の事情で言えば、琉球処分（1879年）によって王国体制が瓦解し、近代の変動が始まったことである。そして、沖縄県においては、公立の博物館・資料館を持たなかったことである。その結果、地元が存在したはずの豊富な琉球関係資料は、県外・国外に流出するという事態に至ったのである。



KREINER, Josef 氏
クライナー ヨーゼフ

ボン大学名誉教授
法政大学国際日本学研究所
客員所員

略 1940年 オーストリアのウィーン生まれ
歴 1959年 ウィーン大学と東京大学東洋文化研究所で民族学、日本研究を岡正雄、石田英一郎の指導の下で学び、柳田國男の指示で1962年から奄美加計呂麻島で集落の社会と宗教を調査、奄美のノロ信仰のモノグラフで1964年にウィーン大学で文学博士号取得。その後、南西諸島、若狭や阿蘇地方で実地調査（～1964年）
1968年 ウィーン大学で教授資格取得

職 1971年 ウィーン大学日本学主任教授（～1977年）
歴 1977年 ボン大学日本学主任教授（～2008年）
1988年 ドイツ連邦政府立「ドイツ-日本研究所（東京）」初代所長（～1996年）
2005年 法政大学特任教授（～2015年）
2010年 国際日本学研究所のプロジェクト「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」「在欧日本仏教美術の基礎的調査・研究とデータベース化による日本仏教美術の情報発信」を指導（～2015年）

著 ○『南西諸島の神観念』（住谷一彦と共著、未来社、1977年／1999年再販）
書 ○『阿蘇に見た日本-ヨーロッパの日本研究とウィーン大学阿蘇調査』（一の宮町、2000年）
○『Sources of Ryukyuan History and Culture in European Collections』（ドイツ-日本研究所、1996年）
○『Japanese Collections in European Museums』（全5巻、Bier'sche Verlagsanstalt、2005-2016年）

【講演要旨】

「琉球王国の工芸美術とヨーロッパの琉球のイメージ形成」

ヨーロッパが初めて琉球に関する情報を得たのは、ポルトガルの航海士ヴァスコ・ダ・ガマがインドへの航路を開いた1498年であった。ダ・ガマの水先案内のアラブ人がアル・グールと呼んだ東方の島国レキオスは金銀や刀などの富に溢れる、秘密に包まれた王国だという風評は、その二百年前のヴェネツィア商人マルコ・ポーロの島国ジパングと混同され、長年探求の目的地とされた。1511年、マラッカを手に入れたその年、最後の琉球通商貿易船が寄港していたが、ポルトガルは詳しい情報を得ないまま東へと進んだ。そして30年という時間をかけてようやく沖縄に辿り着いた。しかしその翌年の1543年に三人のポルトガル人が倭寇のジャンク船に乗って種子島に上陸し、室町時代の日本を「発見」した。それにより琉球はヨーロッパの視野から少しずつ薄れていった。それでも16世紀を通じて、漆器を中心とする琉球の優れた美術工芸製品を何点も手に入れて大切に扱い、母国の王族貴族や教会に寄進した。現在でも複数の美術館に何点も由来や出所のはっきりしないものが調査研究を待っている。

江戸時代に入っても琉球とは接触がなかったにも関わらず、琉球漆器はオランダ東インド会社の膨大な日本漆器の貿易品の中に含まれていた。しかしオランダ人がもっとも捜し求めていた、多大な収益をもたらした商品——屏風、着物、そして最後まで売り上げをトップにしていた磁器とは対比的に、琉球製のものは文政年間に長崎で活躍した大シーボルトの網羅的な収集まで注目されなかった。その時代、再びイギリスやフランスの艦隊が東シナ海へと出た。その一人、バジル・ホール船長がナポレオンとの会話でもたらした琉球は武器を持たない国だという情報は、いまだにヨーロッパの琉球観念の根底に残っている。

それ故、明治の「琉球処分」は1880年代に大きな反応を招き、1873年にベルリンで世界初の民族学博物館を設立したバステアンをはじめとする文化人類者は、自ら近代化の急速な文化変革の動乱時期に突入した「内地」日本に合併されると、伝統的な琉球文化が消えてしまうのではないかと心配し、網羅的に琉球関係のコレクションの収集に力を注いだ。バステアンとはほぼ同時期に活躍した大シーボルトの次男ヘンリーにも注目すべきである。その時代から琉球の優れた染め物、織物も大きく注目されてきた。ただ本島以外、たとえば奄美や先島諸島の染織の収集はむしろ戦後に集中し、アメリカのコレクションに多いという特徴がある。



祝嶺 恭子 氏
しゅくみね きょうこ

重要無形文化財
「首里の織物」各個認定 保持者認定、
沖縄県立芸術大学名誉教授

略 1937年 沖縄県那覇市生まれ
歴 1962年 女子美術大学芸術学部美術学科工芸科卒業
1992年 文部省在外研究員としてドイツ海外研修（～1993年3月）
2003年 祝嶺染織研究所 開設

職 1986年 沖縄県立芸術大学 教授（～2002年）
歴 2006年 同大学 名誉教授

業 1991年 沖縄県指定伝統本場首里の織物技能保持者認定
績 2012年 ベルリン国立民族学博物館所蔵の琉球王朝時代の染織資料を再調査
2020年 個展「祝嶺恭子染織展—琉球の織色に魅せられて—」開催
2023年 重要無形文化財「首里の織物」各個認定 保持者認定

受賞歴 1977年 第1回伝統的工芸品展 内閣総理大臣賞
2004年 第24回ボークラ賞 優秀賞
2015年 沖縄県功労者表彰
2021年 秋の叙勲 瑞宝小綬章 その他多数

著 ○『ベルリン国立民族学博物館所蔵 琉球・沖縄染織資料調査報告書』
書 （一般財団法人沖縄美ら島財団、2013年）
○『祝嶺恭子作品集—琉球の織りいろに魅せられて—』（祝嶺染織研究所、2020年）

【講演要旨】

「琉球王朝文化との再会—先人たちの手わざに触れて—」

1992年10月から1993年3月にかけて、文部省在外研究費を受け、ボン大学日本文化研究所の協力を得て、ヨーロッパ各国に渡った琉球王朝時代の美術工芸品の調査と、その交流の歴史や背景について研究する機会を得た。さらに2012年2月には、沖縄美ら島財団の在外調査事業の一環として再びベルリンを訪れ、収蔵資料の詳細な確認作業や写真撮影を行い、その成果を『ベルリン国立民族学博物館所蔵 琉球・沖縄染織資料調査報告書』として2013年に刊行することができた。

琉球王国では、すばらしい染や織の文化が発達していた。しかし、先の大戦で多くを失ったため、復興を願う人々は参考となる資料や文献を求め、本土はもとより海外にまで奔走した。そうした中、1991年、ドイツのベルリン国立民族学博物館に琉球王朝文化に関する膨大な資料が収蔵されており、その中には紅型や織物が多数含まれていることを知った。全く耳を疑うほどの情報であった。その収蔵品をぜひ自分の目で確かめたいと強く願ったのは、私だけではなかったと思われる。「念ずれば通ず」の言葉どおり、文部省在外研究費による6か月間の滞在許可を得て、派遣されることとなった。

1879（明治12）年の廃藩置県と琉球処分は、ヨーロッパでも注目されていた。ドイツ帝国は固有の王朝文化を育んだ琉球王国の文化に深い関心を寄せ、その消滅を危惧し、1882年には駐日ドイツ領事館を通じて、日本政府に体系的な琉球コレクションの収集を依頼した。膨大な予算を投じた大規模な買上事業であり、物品目録には購入金額まで詳細に記録されている。衣類に関しては、王子・按司から平民に至るまで、階級別および男女別に収集され、晴着や普段着、下着、足袋、草履に至るまで網羅されており、往時を今に伝える貴重な資料となっている。しかし、コレクションの多くは第2次世界大戦末期に行方不明となり、現存が確認されているのは181点のみである。そのうち衣類117点を対象に、写真撮影、寸法記録、織物分解設計図の作成、素材・技法・布幅・織密度・糸の状態・製作地等の記入、緋や花織の模様採取など、多角的な方法で詳細な記録を行い、資料編及び図版編にまとめることができた。調査対象の染物10点、織物89点、その他18点を体系的に整理できたことは大きな成果である。

本講演では、ヨーロッパで再会した琉球王朝文化の遺産と先人たちの手わざが示す歴史的価値および魅力について報告する。



佐々木 利和氏

ささき としかず

東京国立博物館名誉館員
(文学博士・日本文化史、アイヌ
民族史)

略 1948年 北海道陸別町生まれ
歴 1976年 國學院大學文学部卒業
1979年 法政大学大学院修士課程修了
2000年 早稲田大学博士(文学)

職 1967年 稚内地方気象台技術科(～1968年)
歴 1969年 東京国立博物館総務部普及課(以後学芸部資料第三研究室長を経て)
2003年 東京国立博物館民族資料室長(～2004年)
2004年 文化庁美術学芸課主任文化財調査官 歴史資料部門(～2006年)
2006年 国立民族学博物館教授(～2009年)
2009年 北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授(～2012年)
2012年 東京国立博物館名誉館員
2014年 北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員教授を経て
2022年 北海道大学招へい教員(～現在)
2025年 北海道博物館アイヌ民族研究センター長(～現在)

著 ○『蝦夷島奇観』(雄峰社、1982年)
書 ○『東京国立博物館図版目録 アイヌ民族資料篇』(東京国立博物館、1992年)
○『日本の美術 アイヌの工芸』(至文堂、1995年)
○『アイヌ文化誌ノート』(吉川弘文館、2001年)
○『東京国立博物館図版目録 琉球資料篇』(東京国立博物館、2002年)
○『アイヌ絵誌の研究』(草風館、2004年)
○『アイヌ史の時代へー余瀝抄』(北海道大学出版会、2013年) など

「講演要旨」

「東京国立博物館と ベルリン国立民族学博物館の琉球資料」

東京国立博物館が所蔵する琉球・沖縄関係資料(以下琉球資料)はおおよそ300件余ある(現在はさらに増えていると思われる)。この中で最古のものは1872(明治5)年に塙忠韶氏が寄贈された「琉球通宝」1枚である。これ以降、琉球関係資料は少しずつではあるが収蔵されていく。そのなかでも特記すべきは、1884、1885(明治17・18)年に、東京国立博物館の前身である農商務省博物館において、150年をこえる同博物館史上最大の琉球資料の購入を行っていることであろう。その購入のきっかけとなったのは、1882(明治15)年に、駐日本ドイツ国代理公使V.ツェトヴィッツから農商務卿西郷従道あての書状である。

原文はドイツ語なのでそれを抄訳すると

○琉球島の品物、人種学上に関係のもの、王国博物館中にあいそなえ申したく…

別紙人種学部において希望いたしている物品目録を進呈いたします…

右の諸物品は、その出所や使用の目的やその他、なるべく詳細に記載するように
お取り計らいくだされたく…

1882年 代理公使フォン・ツェトヴィッツ

この王国博物館人種学部は当時のベルリン民族学博物館で依頼者は館長のアドルフ・バステアンであった。それを受けたツェトヴィッツの書簡が上記の抄訳である。

そして、その希望品目が以下のものである。

○王国博物館人種学部希望の物品目録の内容

- 1) 食物見本や調理道具など、2) 男女衣服など、3) 人体の装飾、
- 4) 人体を変形すべき物品など、5) 住家模型など、6) 家具類、7) 獣猟機械、8) 農具など、
- 9) 発掘品など、10) 文字見本など、11) 度量衡など、12) 楽器など、13) 玩物など、
- 14) 宗教、魔術などで、総計543点、費用は1,490円27銭5厘になる。

それに付随して「博物館内に列品すべき採集品は、その名称、使用法、種類、出所等を詳細に記さないものは陳列することはできない」と記される。

こうしてドイツ向けの琉球資料が購入されたが、収集は西郷従道から沖縄県令上杉茂憲に書簡が伝達され、それをうけた沖縄県の吏員たちによって収集された。ところで東京国立博物館の琉球資料であるが、これはドイツ向けの資料とは別に収集を依頼したもので、1884(明治17)年2月13日付けの野村博物館長から西村沖縄県令あてにドイツ依頼の資料収集を謝したあとで「別紙目録に記載したものは当博物館の資料に加えないのでそれについても収集してほしい」と依頼している。その結果、購入品は206件、金額は174円31銭1厘となっている。

このようにして東京とベルリンの博物館において、同時期に琉球資料の購入をおこなっており、両者の資料は兄弟関係にあるといつてよいと思われる。このあたりの事情については、萩尾俊章・与那嶺一子・佐々木「農商務省より独逸宛の沖縄関係物品目録について上・下」(沖縄県立博物館紀要22・23)に詳しく論じている。



沖縄美ら島財団の在外調査アルバム
2012年2月
ドイツ・ベルリン国立民族学博物館にて